

## 論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

|          |  |
|----------|--|
| ○氏名      | 和田 崇 (わだ たかし)  |
| ○学位の種類   | 博士 (文学)  |
| ○授与番号    | 甲 第 951 号  |
| ○授与年月日   | 2014 年 3 月 31 日  |
| ○学位授与の要件 | 本学学位規程第 18 条第 1 項<br>学位規則第 4 条第 1 項                                |
| ○学位論文の題名 | 徳永直の創作と理論<br>—プロレタリア文学における労働者作家の大衆性—                               |
| ○審査委員    | (主査) 中川 成美 (立命館大学文学部教授)<br>瀧本 和成 (立命館大学文学部教授)<br>尾西 康充 (三重大学文学部教授) |

### <論文の内容の要旨>

本論文は、プロレタリア作家徳永直について、その代表作「太陽のない街」(『戦旗』、1929年6月)の発表から、1937年12月に著者自らがその絶版宣言をして国策文学に加担するまでの経緯を小説や評論を対象として考察したものである。それは戦前期におけるプロレタリア文学運動の多層的な問題を剥出しながら、同時に徳永直の作品が持つ意義を追求するものとなっている。目次は、序章 徳永直文学の再検討、第1章 『太陽のない街』の大衆性と海外伝播、第2章 芸術大衆化とリアリズム、第3章 転向文学の批判の所在、結章 徳永直の大衆性が示すもの、付録 徳永直著作目録である。

第1章では、労働争議において時には知識人と対立し葛藤する労働者の感情を描き、ロシア文学の受容を経て意識的に労働者大衆の読者を引きつける方法論をもって描かれた『太陽のない街』が、当時のナップの芸術大衆化論争における実作への希求の上に登場し、やがて日独の知識人の手を経てヨーロッパへと伝播した過程を明らかにした。『太陽のない街』は、1926年1月に起きた共同印刷争議を題材としており、徳永も組合幹部として実際に同争議に参加した。執筆当時はまだ労働者であった徳永は、そのような労働者の実生活に根差した感情と労働争議のダイナミズムを、「読者の基準をインテリにおかずに、労働者」に置き、「読ませる」ことを第一条件とする創作方法によって描いた。『太陽のない街』には、『メスメンド』と『セメント』という二つのロシア小説の影響が強くみられ、視覚性を意識したテンポのよい文体や、映画的效果を誘発する素早い場面転換で構成されており、労働者大衆の読者が読みやすい工夫がなされている。そして、大衆的人気を博した『太陽のない街』は、千田是也や勝本清一郎といった在欧の知識人との協同によって、海外へも

伝播した。同作はまずドイツ語に翻訳され、さらにドイツ語からの重訳によってスペインやロシア、オランダでも出版されていく。ドイツ語への翻訳は、早大独文科出身の千田是也と現地のドイツ人との共訳によってなされ、日本国内に匹敵するほどの売上げを記録し、新聞連載もされるなど現地で高く評価された。また、現代日本のプロレタリア文学を代表し、日本の資本主義社会における労働争議を写実に描写した作品として出版時に紹介された『太陽のない街』は、ジャポニズムに代表されるようなエキゾチックな日本のイメージ、西欧の日本に対する「オリエンタリスト」の眼差しを払拭させる役割も果たした。

第2章では、プロレタリア・リアリズムから唯物弁証法的創作方法へと至るナップの理論変遷の中で、狭隘化する組織のテーゼに対して徳永がどのような対案を示し、また自らの創作方法を変容させていったのかについて検討している。『太陽のない街』の創作過程で大衆性を強く意識していた徳永は、大衆文学的手法が労働者大衆の読者を獲得する大きな原動力となることを認識していた。そこで徳永は芸術大衆化に関する論文「プロレタリア文学の一方」で、ブルジョア大衆文学のファシズムへの動員力を指摘し、彼らの持つ大衆性に労働者や農民が強く引きつけられている現状に対する危機感を示すとともに、そのベクトルを自らの陣営に向けて効用化することを主張した。だが、運動中枢部はこうした方向を「偏向」として斥け、高級芸術を改良した概念としての「大衆」向け作品の創作を目指すことを新しい芸術形式として提示した。そこには中枢部を占める知識左翼人の独善性や権威主義が見え隠れするのだが、一方で、組織へのアンチテーゼを突きつけた徳永にも、オポチュニズムとも取れる理論の曖昧さや弱さがあった。徳永の論文「創作方法上の新転換」は、ナップ（コップ）の指導的文学理論であった唯物弁証法的創作方法を批判したことで有名であるが、これまで金科玉条として用いられてきたモルプの文学指導理論の機械的運用を批判して、独自のリアリズムの探求をめざすことを宣言した。しかし、結果として徳永は、マキシム・ゴーリキーという社会主義リアリズムのカリスマに自分を重ね合わせるにより、転向期の左翼作家としてのポジションを確保したのであった。

ナップから離反した徳永は、直後においては、小説「島原女」に代表されるような革命理論で捨象される人々に肉薄する優れた作品を描いたが、そのイデオロギー性は徐々にゴーリキー文学を模倣した私小説的な素朴リアリズムの中に霧消してしまい、彼の作品はプロレタリア文学としては弱いものとなっていった。ここには、個人と組織、しいては労働者と知識人との関係のあり方が教訓的に顕示されている。つまり、ナップという知識人団体が、徳永の主張した大衆性が持つ可能性を摘んだ一方で、イデオロギーの桎梏から解放された徳永は、もはや熟練した一人の職業作家となった。彼がプロレタリア作家であり続けるためには、組織体との有機的な結合が必要だったのである。

第3章では、プロレタリア文学運動が廃退し、転向の時期を迎えた徳永が、国家権力による弾圧を前にしてどのような社会批判をなしたのか、また、どのようにして権力の側へコミットしたのかを考察した。1937年6月に発表された「八年制」は、当時の国策の一つであった義務教育年限延長案を庶民の視点から批判した小説である。徳永の権力への屈

服として象徴的な『太陽のない街』絶版宣言』の半年前に発表されたこともあり、同作ではあからさまな権力批判は描かれていない。しかし、高等小学校への進学が一般化する中、小学校を卒業すると同時に自身を労働力として商品化しなければならない少年と、一方で受験地獄にさいなまれる中流以上の家庭の子どもたちを対比的に描いており、階級の再生産構造を映し出している。だが、そのような疎外の構造を明らかにした徳永も、次第に国家のイデオロギーに内包されていく。昭和10年代の徳永は、多数の小説で労働の価値を描いている。物質的対価を求めない労働そのものに潜む精神的価値を主張することは、労働者に革命主体となる根拠を与え、あるいは自身がプロレタリア作家であることを担保する意味で一見有効であるかのように見え、徳永以外にも中本たか子や間宮茂輔などが、いわゆる生産文学と呼ばれる作品群でそれを強調した。しかし、そうした精神的美德が、勤勉な労働者を育成する模範として転用され、全体主義体制における生産力の増強や勤労奉仕の動員へと結果的に奉仕してしまうのだ。同じことは「満州人」表象にも言える。徳永は1938年9月から10月にかけて、改造社の特派員として満州の日本人開拓移民村を視察し、『改造』や『大陸』といった同社の雑誌に満州ルポルタージュや小説を発表した。徳永の満州文学では、特にルポルタージュにおいて、開拓民（植民者）である日本人が満州人（被植民者）を差別し、両者を隔てる溝が存在することを頻繁に描いており、満州国というイミテーションの欺瞞をある程度は示している。また、満州人から疎外される自己の葛藤を描いた小説では、植民地の大衆に根差した文化を尊重することで、精神的な結合を図ろうと試みる。だが、こうした日本人と満州人の溝を埋めようとする意識も、結局のところ、五族協和の論理を補強するものに他ならない。徳永の持つ労働観や大衆意識は、ある意味では一貫していたものの、イデオロギーの垣根をさまよいながら浮遊していたのである。結章では、戦前期プロレタリア文学運動の中での労働文学者徳永直の日本文学における位置づけと、日本プロレタリア文学運動の問題点を考えようとしている。徳永の創作や評論を分析して明らかとなったことは、まず、デビュー作『太陽のない街』に、日本文学史全体を通して画期的な創作上の試みや現象が随伴していたことである。労働者が自ら体験した労働争議を長編小説で描き、多数の読者を獲得したのはもちろんのこと、その創作方法上の戦略が、ロシア文学の受容や同時代のモダニズム文学との共時性の中で意識的に実践されていた。また、革命運動における世界的な連帯が、同時に文学の流通にも作用し、イレギュラーなかたちで日本の労働者作家を国際作家へと至らしめた。労働者出身である徳永が、自身の出身階級の持つ読書意識やリテラシー、あるいは生活感情を創作実践の際に強く意識していたことを踏まえ、彼のテキストに内在する「大衆性」の問題を考察し、その大衆性は、プロレタリア文学運動を主導した知識人の矛盾を明らかにすると同時に、彼自身が体現したように、あらゆるイデオロギーに転化しうる可能性と脆弱性があることを示された。

徳永の創作や評論を論じることで浮かび上がったこの大衆性は、二つの点で大きな意義を持つ。その一つは、日本の文学史上におけるきわめて稀な労働者作家としての成功例を

示したことである。作家として生活が安定し継続的に創作活動を行い、それによってブルジョワ文壇から読者を奪うことを意識した徳永の大衆性は、日和見主義と批判されながらも、作家として自立的に活動を継続することを可能にした。また、創作方法における大衆読者に対する意識が、彼が晩年まで読者を持ち続けた所以でもある。もう一つの意義は、イデオロギー闘争における大衆の重要な性質を示したことである。徳永は、未組織の労働者や農民を雑誌『キング』に奪われる読者に重ね合せ、大衆が持つ影響力を感じ取り、彼らを教化や啓蒙の対象としてではなく、ただちに動員すべき勢力と捉えた。これは、ハンナ・アーレントが政治的に無感覚な大衆が全体主義の潜在的な原動力となることを指摘したように、大衆性がイデオロギーの性質を問わずに転用可能なものであることを示している。さらに、徳永のテクストは、革命運動の主体として理想化された大衆ではなく、時には愚かで、時には政治に対して怒りも発露する大衆の諸相も描いた。大衆は、多種多様な層が折重なることで構成されており、必ずしも革命の主体となりうる積極面ばかりを持つのではなく、また、無感覚なものとも一元化できないのである。

#### <論文審査の結果の要旨>

本学位申請論文は、これまでのプロレタリア文学研究で看過されがちであった徳永直に焦点を当て、その戦前期における作家と文学運動との相互関係を稠密に調査しながら、プロレタリア文学運動の日本文学史上における意義を明らかにしようと試みたものである。戦後から1960年代前後まで日本近代文学研究の主要な一翼を担ったプロレタリア文学研究は、現在殆ど忘れ去られている状況であるが、2008年ごろからの『蟹工船』ブームを背景としたプレカリアートへの注目は、プロレタリア文学研究の必要性にも注目させた。「貧困」を社会的事象として浮かび上がらせる一方に、そうした現象の背景をなす政治的、文化的布置の偏在化は、新しい「貧困」を構造的問題として提示した。労働環境の変化とともに訪れた貧富格差、階級格差は、まさしく昭和初頭期の写し絵といってもよいほどであり、現在の問題としてプロレタリア文学研究の新たな課題は呈上されたのである。和田崇氏はプロレタリア文学が組織形態をもって作家の創作態度に深く関与したことに注目して、プロレタリア文学が読者主体として想定した「労働者」出身作家でありながら、研究の蓄積の少ない徳永直を論じることの意義を主張している。この試みは非常に貴重であり、大きな成果を日本近代文学研究につけ加えることとなった。以下、その評価について記す。

先ず、本論文の優れたところは、次の三点に集約できる。一点目は、プロレタリア文学の代表的作家の一人と目されながら、未だ全集すら編纂・刊行されたことのない徳永直の文学に、真正面から挑戦して、戦前期プロレタリア文学における徳永の位置を確定したことである。昭和初年代におけるプロレタリア文学の隆盛から弾圧、転向、そして運動の壊滅と、ファシズム期の創作活動の困難までを概括して、折々に教化された運動理論、創作理論との壮絶な戦い、および戦時下における国策協力の強制、あるいは傾斜をたどることによって、徳永を代表とする日本における労働文学、プロレタリア文学の可能性と不可能

性を余すところなく描出したことは、高い評価を与えることができる。二点目は、『太陽のない街』の外国語への翻訳、そして普及の実態を詳細に調査して明らかにしたことである。プロレタリア文学がロシア革命以降のマルキシズム文学、コミュニズム文学の一環であることは勿論であるが、それは世界大規模の文学環境の出現ということをも意味していたことは忘れ去られがちである。ソ連邦はモルプ（国際革命作家同盟）を組織して全世界への発信をした。文学が政治の教化、啓蒙を果たしていく装置として重要であるという認識は世界に共有されていた。第二の赤都・ベルリンで『太陽のない街』が翻訳されるのは、まさにその時期である。世界同時性をもって労働問題は共有されるファクターとしてあったのである。しかしながら、徳永が『太陽のない街』を執筆するときに『メスメンド』と『セメント』という二つのロシア小説から影響を受けていたという分析は初めてのものであり、非常に貴重である。原典からその派生をたどりながら、作品内部に取り込まれていく過程を和田氏は綿密に分析、説得力のある論旨となっている。この時期ロシア文学のみならず世界のプロレタリア的性格を持った作品や、ルナチャルスキー、シクロフスキーなどの芸術理論書が次々と翻訳されていた。徳永がそれらとの連関の中から創作方法を掴み取ってきたことはこれまで指摘されてこなかった。三点目は、プロレタリア文学における政治と文学との関係にとどまらず、ジェンダーやポスト植民地理論から徳永を見据えていく視点があったことである。プロレタリア文学研究は往々にして作家・作品研究に焦点化されがちであるが、和田氏は徳永を通して日本プロレタリア文学が抱え持った問題性から離れることなく、運動体としての側面にも光を充てて、一貫した論述に専心したことは高く評価できる。労働者作家としての徳永直の意義を鮮明にした。

和田氏が本論文で追求する「大衆性」の問題は、こうした歴史的、政治的、文化的変遷の中で変質していくことを倫理的な事項におとしめることなく、プロレタリア文学運動、およびファシズム体制のなかから論理的に考察して、非常に説得力をもった結論を導くことが出来た。それはまた今日的な問題であることを和田氏は十分に理解して、独自の見解を達成している。ただ、本論文の対象期間が戦前期で終わっていることが惜しまれる。出来得れば、戦後の徳永の動向、特に人民文学創刊と新日本文学会批判、またソ連邦視察などまでを視野に入れていったときに徳永への最終的評価は完成されるのではないかと考えられる。今後の課題として、ますますの研究活動を期待したい。

付録としてつけられた「徳永直著作目録」は徳永研究の第一人者、浦西和彦氏（関西大学名誉教授）の卓越した仕事を受け継ぐものとして評価できる。未だ全集がない作家である徳永の書誌的基礎作業は浦西氏によって先鞭がつけられたが、新資料の発掘を含めて今後、十全なものとなっていくことを和田氏に望みたい。

以上の審査結果を踏まえて本論文は今後新たなプロレタリア文学研究の牽引をなす可能性をもった優れたものであると審査委員一同、評価した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2014年1月24日（金）午後4時から6時まで、立命館大学末川記念会館第二会議室で行われた。審査委員は主査・中川成美（本学）、副査・瀧本和成（本学）、尾西康充（三重大学教授）の三名であった。公開審査の質疑応答において申請者の応答は的確であり、また理論的にも破綻なく円滑に進行した。また本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程（日本文学専修）の在学期間中における学会誌を含む多数の論文発表、学会発表などの様々な研究活動、また翻訳等における外国語能力など、博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

よって、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。